

## 恩師訪問

### 武藤俊郎先生

母校に勤務なさった教職員の近況をお伝えするこの企画も十一回目。今回は、昭和二十九年三月の本校卒業生でもある国語科の武藤俊郎先生にお願いした。昨年十一月五日(水)に、わざわざ羽城館(同窓会館)までご足労願ひ、広報委員の柴山芳隆がいろいろお話を伺った。

初めに、秋田高校に勤務なさった時期を、校務分掌等も含めながらお知らせ下さい。

昭和四十五年四月に秋田北高から転勤して来まして、五十二年三月まで八年間勤務しました。赴任から六年間連続して担任し、その間に卒業生を二回出しました。分掌は進路や生徒指導が中心でしたが、軟式野球部の監督を六年間務めたことがとても印象に残っています。秋高から秋田工業に転出し、その後また北高に戻って平成八年三月に定年退職しましたが、その年一年間だけ、今度は講師として再度母校のお世話になりました。

軟式野球との関係が特に印象に残っておられるということですので、先生ご自身の体験も含めて、野球のことをもう少し詳しくお願いします。

私は子どもの頃から野球が好きで、中学校時代は野球部に所属しておりました。ポジ

ションはサードが中心でした。秋高に入ってからが汽車通学の関係で野球部は無理でしたが、大学(京大)では、少々ながらまた野球に取り組み、



ザルツブルグ城にて (2008・10・16)

関西六大学野球リーグの選手にもなったりしました。また、初任校である秋田北高ではずっとソフトボール部の顧問をしていたので、そういう経歴が目にとまって、軟式野球の監督を命じられたようです。

ただ、硬式と違って軟式はグラウンド、試合日程、審判など、さまざまな面で条件に恵まれておらず、部員も監督も苦勞が絶えませんでした。私

の場合は、秋高の監督と同時に、県高野連軟式部会の理事長も四年ほど務めなければなりません。だったので、物理的にも結構大変でした。ひどい雨の中、全国大会の予選となる県大会を秋高のグラウンドで、やっとなんて来てもらった二人だけの審判とともに実施した日のことなどを鮮明に記憶しています。ただ、苦勞を共にしたせいでしょ、監督と

## 親しい人たちと古典を楽しむ

選手の絆は大変強いものがある。特に、私が担任していたクラスで軟式野球部に加わっていた生徒達は今でも我が家に遊びに来てくれます。

軟式野球以外の思い出となく、秋高の百周年の場に立ち合うことができたということでしょうね。『秋高百年史』の編纂事業にも関わりました。主に運動部関係の記述を担当したほか、年表の作成などをまかせられたものでした。田沢湖で合宿作業をしたり校正のために東京まで出

かけたりましたものです。学校の先生、それも国語の先生になられた動機は何でしたでしょうか。

秋高に入学した年に古典を教わった鈴木勝三郎先生の授業に大きな感銘を受けたというのが最大の理由です。私はもともと、教科としては数学が好きでしたが、「万葉・古今・新古今」を中心にした鈴木先生の授業は実に魅力的で、私の中に古典に対する強い愛着を持たせてくれました。大学ではフランス文学に進みましたが、最終的には国語国文学を選び、

卒論は近松門左衛門の心中物にしました。卒業が近づいた頃、秋田北高の校長先生から京都の下宿に直接お手紙を頂戴し、そのまま北高に赴任することになった次第です。

定年退職なさった現在も、古典の分野でいろいろ活躍なさっておられるのをマスクミで拝見しています。そうした事と併せて最近のご様子を

ご紹介したいのですが。土崎図書館主催の連続講演会が終了した折、その時の受

講生を中心に「古典を楽しむ会」が結成され、それが、同

図書館を会場にして、現在まで十年ばかり続いています。近松の作品の他に『源氏物語』などを読んできました。また、民間の文学同好会が催す講演会にも毎年招かれています。それらとは別に、自宅で和氣藹々のうちに家族や友人と古典を楽しんだりもしています。こちらも『万葉集』から始まって多くの古典を読んできました。また、「山湯会」という山の会にも参加して、駒ヶ岳など県内の山々の他、時には県外にも遠征して、マイペースで登山と温泉を楽しんでいます。海外旅行にも欧州を中心に四回出かけましたが、こちらも「のんびり」がモットーで、一番最近、昨年のウイーン探訪でした。

最後に、今の秋高生にひと言お願いしたいのですが。

それは、まず自分を豊かにしなさいということですね。どういう分野でも構いませんから、社会に出てからも心豊かに生きていけるもの、基本を高校生の時分に見つけ出して欲しいと思います。また、秋高生は実に伸び伸びしていて、それはそれでこれから大事にして欲しいのですが、時には節度が必要だということも理解してもらえればと思います。